



世界の先進工業国の中で例外的に宗教的なアメリカ。国民の半数が食前の祈りを日常的に唱え、4割近くが毎週礼拝に出席するこの国を、人種、所得、教育、政治、道徳など多くの指標を交錯させて綿密な統計調査で描き出したのが本書である。

著者の1人パットナムは、『孤独

なボウリング』で社会関係資本の衰退を論じ、『われらの子ども』でアメリカン・ドリームの変退を論じた。本書はこの2冊をつなぐ15年の間にまとめられている。著者たちも念を押すとおり、データの相関は因果関係を説明しない。それでも、読む人のもつ視点ごとに、興味深いストーリーの発見がありそうである。

600ページを越す大部を簡略に紹介

## アメリカの恩寵

R・D・パットナム、D・E・キャンベル著



原題＝AMERICAN GRACE  
(柴内康文訳、柏書房・7800円)  
▼パットナム氏は米ハーバード大教授。同大ケネディ行政大学院学長、米国政治学会会長などを歴任。キャンベル氏は米ノートルダム大教授。

## 多様な宗教が支える寛容性

するのは気が引けるが、副題が示すところからは、アメリカがリベラル化とその反動を繰り返して今日の分断に至ったこと、にもかかわらず宗教は今なお社会の靱帯として人びとを結びつける機能を果たしていること、の2点が浮かび上がってくる。

多くのアメリカ人は、人生に何度か宗教を変える。たとえば、メソジストの家庭に生まれ育ち、結婚して

ユタヤ教に改宗し、妹は結婚してカトリックになり、子どもの1人は世俗主義で1人は福音主義である。これは著者自身の実例だが、ごくありふれた家族像である。そういう人が反ユタヤ教や反カトリックや反世俗主義になることは難しいだろう。

こうした流動性と多元性が、アメリカ社会の寛容性を下支えしているのである。だから「自分の宗教だけ

が真実だ」と信じるハードコアの信者はほんの1割で、アメリカ人の8割は「多くの宗教に真実がある」と考えており、残りの1割は「どの宗教にも真実がない」と答えている。同時に、諸宗教や無宗教を含むこのような群雄割拠の多様性こそ、アメリカが今なおプロテスタント的であることを裏書きしている。すべての宗教が「成員の自発的選択による所属」という組織形態をとるわけで

はない。だが、アメリカでは仏教徒も日曜ごとの礼拝に集まり、イスラム教のイマームも牧師のように振る舞い、カトリックも教区制度を飛び越える。プロテスタントイズムは、アメリカ社会の基本的なオペレーティング・システム(OS)なのである。

《評》 国際基督教大学教授

森本 あんり